
真剣で心を通わせろ！

首輪付き獣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で心を通わせろ！

【Nコード】

N4766BA

【作者名】

首輪付き獣

【あらすじ】

主人公、神埼改かんざきあらたが川神学園に通うため川神市にやって来たところから物語は始まる。

亡き義父に言われた「人と繋がれ」、この言葉を実践するために川神市を舞台に様々な人物と交流していく主人公と一癖も二癖もある武士娘達の物語。

序章（前書き）

色々拙いご都合主義満載の駄文ですが暇つぶしにでも読んでいって
くれると嬉しいです。

誹謗中傷、ダメ・ゼツタイ！

感想は喜んで拝見します（＾－＾）

序章

『川神鉄心』…

俺が最も尊敬する武人の1人であり、日本が世界に誇る武神だ。

孫の川神百代も強大無比な力を持ちこちらも武神と称されているが・
・。

「どの程度のもんかね・・・」

鉄心先生以上とも噂されているが正直信じられない、先生とは昔に一度会ったきりだが

心技体全てに優れた理想の武人ともいえる人だった（表面上は軽く見える場合もあるが）。

まあ先生の孫であり武神とまで呼ばれているからにはきっと高潔な人物なのだろう。

「ま、会えば分かる・・・か」

期待と不安を胸に抱きながら俺は目の前の川神院に向かって歩き出した、新しい日常

その一歩目を。

一話 武神との再会、まだ見ぬ学友（前書き）

主人公の名前は、かんざきあらた。と読めます。
・・・・変な名前ですね

一話 武神との再会、まだ見ぬ学友

人と繋がれ――――――

孤児だった俺を拾い武人として育ててくれた義父――『神埼一郎』が最後に残した言葉。

父として俺を愛し、武人として俺を鍛えてくれた恩人の、最後のアドバイス。

元々親父は鉄心先生の弟子であり各地を修行で回る最中で俺を拾ったらしい。

親父は天涯孤独で身寄りもなく鉄心先生を師として父として慕っていた、というのは昔一度鉄心先生に会ったときに父から聞いたことだ、いつもの仏頂面をゆがませて子供のように嬉しそうな顔で語っていたのでよく覚えている。

それから月日が流れた、ある日のことだった、親父が倒れたのは。

強かった親父も病には勝てなかった、心臓を患いあっけなく逝ってしまった。

茫然としたまま親父の死後家を整理している最中に手紙――遺言状を見つけた、

自分の死期を悟り、用意しておいたのだろう。

読んでみると俺への愛の言葉――等はなく、今後の身の振り方が淡々と書かれていたのがなんとも親父らしく俺は笑みを零した。

書いてあったことを簡潔にまとめると。

今後も武人として精進しろ。

これからは心に重点を置いて鍛えろ。

そのために人との関りを積極的に持て。

鉄心先生に連絡しろ、力になってくださるだろう。

とのことだった、俺はすぐに書いてあった連絡先（川神院だった）に連絡し、鉄心先生と話をした。先生は俺の事を覚えてくれており現状を話すと「力になろう」と同時に「辛かったじゃろう」と言われ情けないことに俺はしばらく泣いてしまった。

その後俺が泣きやむのを待ってから鉄心先生から提案があったのだ。

「川神に来て儂の学園に通わんか？」

詳しく聴けば鉄心先生は川神院の総代だけではなく学園も運営しているとの事で、その学園に生徒として通う気はないかとのことだった。

俺は親父の最後の言葉を思い出す。

「人と繋がれ」

遺言にも人との関りを持って書いてあった、これを実践しようと思っていた俺にとって鉄心先生の言葉は渡りに船だった。

そして俺はその誘いを受け単身川神に渡り――――――

「今に至る……と」

川神院内を歩きながらふと現状を思い返してみたが――――――

「恥ずかしいな……」

電話越しとはいえ泣いてしまったのは恥ずかしい……思い返すと穴を掘って埋まりたくなる。

などと馬鹿なことを考えている内に1人の修行僧に話しかけられた。

「参拝の方ですか？ 申し訳ありませんがここからは一般公開していない場所です……」

「ああ、すいません……今日鉄心先生にお会いしに来た神埼改といます、鉄心先生はいらっしゃいますでしょうか？」

「ああ、神埼改様でしたか……総代からお話は伺っております」

事情を話すとその修行僧は奥の敷地へと俺を案内してくれた。

奥へと案内されながら川神院の敷地をキョロキョロと見回してみたが本当に広い。

奥へ奥へと行くにつれて川神に來た時から感じていた非常に大きな二つの気がより一層強く感じられる、一方は鉄心先生、もう一方はおそらく川神百代だろう。

それから少し歩くと1人の黒い長髪の女とすれ違った、女は俺を見て一瞬「ん？」といった風の顔をしたがすぐにその場を去って行った。

まさかあれが川神百代だろうか・・・？あまりにも感じた気が荒々しく高潔な武人には到底思えない。

おそらく別の門下生だろうと結論づけ、歩いて行くとようやく会うことができた。

「お久しぶりです！鉄心先生！」

「うむ、10年ぶりかのお、大きくなったもんじゃ」

武神、川神鉄心——その人に。

「よくきたのお、歓迎するぞ、改」

「ありがとうございます」

10年ぶりに会った鉄心先生はやはりというか外見が全く変わっていなかった。

「さて、さっそくじゃが今後について話そうかのう」

「まずこちらでの住居じゃが、寮に入ってもらふことになる」

「寮……ですか」

「うむ、人と関りを持つには1人暮らしよりこちらの方がよほど良い
しう」

「そうですね、ところでどんなところなんですか？」

「島津寮といつての、古かったのでお主に合わせて増築したんじや
よ」

ああ増築……増築……増築……増築！？

「あのっ！流石にそこまでしてもらつては——」

増築と聞き慌てる、わざわざ俺の為にと思うと申し訳が無い、そう
思ったが。

「これこれ、なにか忘れとらんか」

「忘れ——あ」

「思いだしたようじゃの、お主こちらに来るのを決めた際に一郎の
遺した金を送ってきたじゃろう」

そうだった、親父の残した大量の金を使いあぐねて、住居の確保に
使ってくださいと信用できる鉄心先生に預けたのだった。

「その金で増築したからの、お主が気にすることはないぞ」

「というかついでに改築もできると向こうは喜んでおったしう」

「そうですね、預けたお金は後どれくらい？」

俺の質問に――まだ9割以上残っておる――と鉄心先生は答える。

引き続き管理をお願いし、俺たちは今後について話し合った。

side 百代

今私は毎週恒例の金曜集会に集まっている。

新学期が始まってから新たにクリとまゆまゆを加えた風間ファミリ―は今までにまして騒がしい空間になっている、もつともこれが心地いいのだが。

「んでよ、そろそろだよな？」

「何が――？」

筋トレをしながらの岳人の質問にこれまたゲームをしながらモロロが答える。

「転入生の話だよ！二年の転入生！」

「そういやそうだったなあ！おもしれー奴が来ねえかなあ！」

おもしろそうだぜー！とはしゃぐキャップ・・・分かりやすい奴だ。とはいえ私も興味はある。

「弟よーお前は何か聞いてないのか？」

「んー今のところなにも情報はないかなあ」

「転入生かく強い奴来るかしら！」

「うむ、出来るなら競い合える強者がいいな」

「あわわ・・・友達になれるでしょうか」

「やれるよまゆっち！転入したての寂しい心を狙い撃ちしてやれ！」

思い思いに転入生についてで盛り上がるファミリーだがこれには訳がある、

ファミリーの内、大和・キャップ・京・クリス・由紀江の5人が住む寮・島津寮。

その島津寮が少し前に改築と増築を行ったのだ。

古い建物なので改築は分かるが問題は増築だ。寮に新しく部屋が出来たということは新たに入居者が来るということ、そして管理人の麗子に大和が聞いたところ転入生が来るとの情報が入ったのだ。

部屋自体は一階に造られたが島津寮の構造上二階にはもう余裕がなく必然的に一階になったのだ、つまり。

「美少女が来るかも知れねえんだよなあ！俺様期待大だぜ！」

そう、その可能性もあるのだ、転入生が来ると分かってても性別までは不明だったので大和は人脈を駆使して情報を集めたが結局大した情報は入らなかった。

「・・・まあありえなくはないけどやっぱ男子じゃない？期待しすぎると後悔するよ」

「京は分かってねえなあ！美少女ラッシュが来ると俺様は確信しているぜ！」

「ラッシュって・・・しょーもない」

「僕としてはあの工事した業者が気になるよ・・・工事速度が超スピードなんてもんじゃないかったもん」

「まあそろそろ来るってのは前から分かってたし、来てのお楽しみだな。」

「そろそろ賭けの準備しとかねーとな！」

クリ吉に賭けごととはよくないと説教を食らう弟とキャップえを見ながらぼんやりと考える。

（川神院内であった男も丁度そのくらいの年齢だったな・・・）

もっとも何の気も感じなかったので武に関しては期待できそうもないが。

できれば違う強者がこないかなーと思案する。

百代はまだ知らない、その男こそが転入生であり、良い意味で自分の予想を裏切ることを。

百代は、まだ知らない。

一話 武神との再会、まだ見ぬ学友（後書き）

島津寮は一階が男子、二階が女子になっていますが部屋が一階に造られたのは来るのが男子だから、ではなく構造的な理由なので女子もあり得ます。・・・確率は低いし結局男ですが（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4766ba/>

真剣で心を通わせろ！

2012年1月13日03時00分発行